り沈んだりするのが見えて、朝の十時ころには到着のこと。このような思い出は一生忘れられることのできない大記録となることと思う。

抑留捕虜生活の実態

東京都 小沼文平

昭和二十年九月十日満州国北安収容所出発、ソ連領ブラゴエスチエンスクに上陸いたし、内地と違い早くも秋冷の気候となっておりました。上陸後は毎日ソ連の広大な原野にバレイシヨ畑が延々と続いている、そのバレイシヨの取り入れをしながら、くる日もくる日も続き、十一月ころまで続いたのであります。その間の食糧の支給は何一つなく、バレイシヨの取り入れ作業をしていたので、わからないようにちようだいで、飯ごうで炊き、食べて一日を過ごしながら、奥へ奥へと前進を続けたのであります。

そして十一月五日シベリヤ・テルマ収容所に、一個大

隊くらいの捕虜が入ったのです。山奥の廃坑ばかりあるところの収容所でした。翌日から廃坑のような何を見ても古々しい、入り口などは今にも落盤しないだらうかと思われするような炭坑の入り口でした。夜ともなると坑内には電気はなく、カンテラという携帯用の重油の入れであるランプが一個渡されます。入坑は前半後半に分かれ、前半は昼間、後半は夜間というように分かれて入坑です。入坑時は腰にカンテラを下げ入り口にある炭車を一人で押して、入坑です。炭車のみでもなかなか重く坑道を奥深く進むのですが、登り坂あり、下り坂あり、思うように進めず時間がかかり現場に着くのも容易なことではありません。現場に着くと、炭車に石炭を掘って満炭車になるまで、何時間でも掘り続けなくては坑から出ることはできません。一トン車一杯がノルマです。

食事の支給は、最初のころはパンに芋のスープでしたが、そのうちパンはなく塩湯の中にジャガイモの小さなのが二、三個くらい、あるときは馬の食糧である燕麦のスープ、またニシンの塩付けが一匹のときもありました。このような食糧が毎日続くので、やせ衰え仕事もな

かなかできません。身体のぐあいが悪くても仕事を休むことが許されません。警備兵に銃を向けられ驚かされるし、体力はますます低下していくのであります。

前半の部で入坑しても、体力がないから、自分のノルマがなかなかできず、後半の部が入坑してきても出ることができません。体力がない友はますますぐあいが悪くなりやせ衰えていくのです。食糧はなし、仕事は毎日ノルマで働かされるし、栄養失調で倒れていく友が多くなっていくのです。まことに非人道的であります。食事を与えず、仕事は強制ノルマを達成できるまでさせられ、生きているのが不思議なくらいであります。

また、テルマ収容所から、酷寒の寒い時期に中隊は移動したのです。それが何年何月か記憶がないのです。大草原に、真っ白い雪のある木造建ての大きな体育館のような板張りの建物でした。農作物の取り入れのためでした。毎日寒い雪の原に大豆の木を探しながら、大豆もぎです。三十センチもの雪の積っている草原で、大豆の木を探してきます。体の悪い人は食事の用意するのに使用するまきとり、いやまき探しに出るのですが、草原で雪

の中ですから、なかなか見つかりません。歩くにも正面に歩くことができず、よろけながら、風でも吹くと倒れ、少しのものでも避けることができません、転んでみたり、よろけてみたり、普通では考えられぬことばかりです。食事は収容所中でも一番悪く、毎日三回の食事が塩湯が飯ごうの中ぶたに八分目くらい小さなジャガイモが二個くらいしか入っていません。それがぐる日もくる日も続いたのです。

防寒具は一人一枚よれよれの薄くなった毛布、員数だけの外套、小さいのあり大きなものもあり、とても着られないようなものもたくさんあり、仕事で外に出るときは、屋内の仕事の者と交換して出るのです。

夜寝るときは、一枚の毛布を敷き、その上に三人寝て、毛布を二枚掛けて休むのです。翌朝、点呼をとってみると、毎日のように一人欠け、二人欠け、隣に寝ていても知らないのです。栄養失調で倒れた友は気の毒でたまりません。

私も酷寒と飢えとの闘いで栄養失調と痔ろうになり、それがもつて戦友たちより六か月くらい早く復員したの

ですが、いろいろな病気になり、手術も数回いたしました。現在も後遺症で悩んでおります。

昭和二十二年五月二十五日、栄養失調のためテルマ収容所を出発して、ナオトカ港でしばらく築港作業をいたして、六月十二日ナオトカ港で興安丸に上船、六月十六日舞鶴に上陸す。

凍土の中の友

新編 田村 恭 一

北へ北へと航行し出した船に私たちの故国へ帰りつく夢は無惨に破れ去った。

北海道の港へ輸送してくれるなどありましたのだ。

船内は騒然としたがいかなともしがたい。

薄暮、船は小さな港へ入った。すべてのものが貧しい異国の風景であった。

何のためか懐かしい歌謡曲の「湖畔の宿」をポリウムをいっぱい上げて流していた。

暗くなった埠頭に照明灯がつき下船が始まった。ソ連の哨兵（カンボーイ）が『捕虜々々ベストレベストレ』とドスを利かした声で、絶え間なくなっていた。

『畜生だましやがって、火事場泥棒奴』

『我々をこの地で労役に使う気だナ』

ふんまんやる方ないが指示どおりの行動をせざるを得ない。やがて長く連結したオンボロの貨車にすし詰めになり、汽車はノロノロと出発した。どうなるのであろう、これからの運命を考えているのだろう、お通夜のような沈黙が続く。汽車は時折停まって長い時間をかけ一団の兵たちが降ろされた。

『オーツ頑張れよ元気でナ』これしか言葉はなかった。夜が明けると、沿線に早く運ばれた連中が仕事をしていて私たちに手を挙げている。たばこをくれという合図をしている兵隊もいた。私の隊はトモンというちっぽけな町に下車させられた。たしか第二十八ラゲリだっただと思う。建物はなく、幾つかの幕舎に枯れ草を敷いたのがこの日からの宿であった。

九月というにすごい寒さで、抱き合って寒さには耐え